

花港伝奇

作・天波 八次浪

華は 研を 破り 水を 燦す
は な こたま やぶ みず とか

序 玖刈ノ椿

椿は冬に咲く。

椿は茫漠を染めて落ちる一点の紅。

春には朽ちる宿命。

椿の薙刀の茎に刻まれし銘は玖刈。

玖刈は奇眼一連の巫覡なり。

玖刈椿は神敵九十九を討つ刃なり。

今は昔、岐嶽に大百足あり。

旭皇、岐嶽の富鉞を求む。

奇眼一連の覡、刀を携え岐嶽に入る。

然れど伐つこと能わず。

覡、百足の一足を討つ。

百足、忽ち黒雲の如き九十九と為る。

九十九の毒息は九里を覆い、岐嶽は黒雲に

没みて旭皇の威光も及ばず。

九十九の毒は覡を悶絶壁地の末に殺し、奇眼一連を害えり。奇眼は白み、身は類れ、鱗は逆立ち剥ぐり、飛ぶも得せず。

病める奇眼一連に靈威なし。

吾が麗 奔帝国は都大路を鬼が行く魔境。

九十九の足は都にすら潜み、玖刈を狙う。

巫 玖刈椿、九十九を伐つ靈威を玖刈の刃に宿ら為むと掟て、社を起ち青真国に航る。

青真国は蓬崑結索に護られし泰平の地。

然りとて辺土には鬼が蔓延る。

此より語るは奇し物語。

玖刈椿が花港に於いて、蟲を屠り鬼を斬り、

刃を爍かす様を伝えるものなり。

第一章

粕 罨

はくばつ
魃 魃

神薙ぎ、

花港の摩天楼で

天蟲を斬る。

一 蓬崑結索

6

二 穢素の煙

12

三 麗帝の巫

14

四 椿と玉蘭

17

第二章

撞 穴

ちみ
魃 魃

八卦師、

白介の廢墟で

地鬼を討つ。

一 痕

19

二 鬼律

22

三 白界域

24

四 鬼哭啾々

28

五 椿の到る処

31

第三章

餓 臥

もうりよう
魃 魃

神和ぎ、

洪川の水門で

水神を爍かす。

一 飛礫

34

二 供儀

37

三 臥龍

40

四 爍す

43

五 後日譚

47

語り手

玖刈椿くがり つばき
雷玉蘭ライギョクラン

麗奔帝国の巫女
青真国の八卦師

出演

李梓睿レイ ジーヨウ
干仁ガン レン

風水師見習いの少年
花港鬼律府の鬼律師

劉多門ラオ タモン

花港の著名な風水師
三鱗重工の社員

蔡ツァイ

道士

伊都原いとばる

麗奔帝国外務省の調整官

第一章

神薙ぎ、花港の摩天楼で天蟲を斬る。

粕 罨

一 蓬崑結索

6

二 穢素の煙

12

三 麗帝の巫

14

四 椿と玉蘭

17

魄魃^{はくばつ}たる粕罨^{バツカ}は天蟲^{てんこ}である。天空より降る粕罨の爪牙は古来より天罰と云われてきた。宿主の死によって人の体内より解き放たれた三尸^{サンシー}が天帝に認められて粕罨となる。罪惡なき者は粕罨に傷つけられることがないと云う。高い空に棲み、地上と関わることは稀だが、近代以降、爛式^{ランフエルノ}炉から排出される穢素^{えそ}に、灯りに集う虫の如く引き寄せられ、体内に穢素を蓄えた都会の住人を襲うようになった。罪科を責する声と共に獲物を傷付ける。高山の修行者には粕罨が降りる靈地に身を晒す苦行が言い伝えられている。粕罨は蟲であり、蟲は結界や光輝^{しんずいどう}によって退けられる。結界から突出した高層階では神髓^{しんずい}灯を用いて防護を施すことが肝要である。

一

蓬崑結索

渾天杖こんてんじょうの占環せんかんがくるくると回る。

媽祖廟マツビょうから流れてくる線香の煙を切って、

三つの金環が交差する。

外側の環は取っ手と一体の人環じんかん、要は杵。

真ん中の環は水平と方位を示す地平環ちへいかん、いわば羅盤らばんだ。

内側の環は、留めれば星を指す天道環てんどうかん、緩めれば氣脈や風を示す占環せんかんになる。

蒸し暑く風いだ空氣は、線香の煙を珈琲コーヒに

浮かぶ奶油クリームみたいにゆるゆると蛇行させる。

裏腹に、氣脈の清流は占環を快活に回す。

李君リが掲げる五星缸子カンテラの硝子管の中では、

風いだ魄漿バクジャンの水面下に五つの色珠が穏やかに留まっている。

緑珠りよくじゆさい歳星せきじゆけいと赤珠こくじゆしん螢惑えいごくがくるくると踊る。

黒珠くくじゆしん辰星ちんせいは水深の半ばを揺蕩たゆたっている。

黄珠おうじゆちん鎮星ちんせいは硝子管の底に沈んでいる。

白珠はくじゆたい太白たいはくは水面直下に浮かんでいる。

「異常なし、よし」と

言い切って、ちら、と李君は私を見る。

「だよね、雷姐ライねえ……？」

一抹の不安を滲ませる李君。いい勘だ。

渾天杖を路地に向ける。唐辛子の簾が掛か

って店の通用口と見分けがつかない路地への経路かざに翳した途端に、占環が小刻みに揺らぐ。

「えー？」

「いやあ、いい勘してるよ李君」

李君は路地の入口に駆け寄って五星缸子カンテラを

上下左右に動かすと、口をへの字に曲げる。

「細いよね、この裂け目さ」

羅盤らばんを掌に乗せて、方位を確認する。

風水師の所作が身に付いてきている。

「蓬萊山ほうらいさんがこっちで……崑崙山こんろんさんはあっち」

李君は羅盤を回して、目線を空に走らせる。

遙か南東の海底、地の生じる蓬萊山。ほうらいさん

遙か北西の山嶺、地の果てる崑崙山。こんろんさん

この双つの聖山を真人帝しんじん閼チヤンが索で結び、

不可視の聖なる大河を築いた。

蓬崑結索フオンクオンリーツアオは惡蟲惡鬼バケモノを斥しりぞける。直下に

は数千年の歴史を持つ都市が並んでいる。

此処、花港フアーゴンは蓬崑結索の直下から千里ほど離れている。

蓬崑結索のほつれた糸が垂れ落ちて地表を掠める経路に花港は開かれた。

聖なる流れが及ぶのは港から洪川ホンまでの幅四里の区域のみ。

この先、古式ゆかしい建物が並ぶ中心街の花柱地区フアーシュが、近代以前の花港全域だった。

冷たい空氣が流れてくる路地を、五星缸子カンテラを掲げて進む李君の所作を眺めて歩く。

李君は不可視の結界に空いた細い裂け目をいろだま五星珠の挙動から着実に掴んで追っていく。

空は眩しく、この路地はまだ暗い。

聖なる流れの中にある花柱地区フアーシュは、何もしなくても護られている。

市街が境界を越えて外へと拡がる度に、風水師たちは経路を引いて結界を張ってきた。

結界は外域都市の基盤だ。

人が作った結界は解はつれも破やぶれもする。

我々は日々、結界に異常がないか見回ってこまめに修繕している。

両側の煉瓦の壁はひんやりと静かで、遠くから大きな獣の溜息に似た蒸氣の音が響く。

ひゅうー、と李君が重ねて口笛を吹く。

花港はここ十年で様変わりした。

蒸氣エンジン原動機が現在の爛式炉インフェルノになって、世界

の風景が変わったと老師せんせいは言っていた。

爛式炉インフェルノは南氷洋の白子神の神髓液ワインを穢素ヒトガタに触れさせ、生じる業火ごうかの熱で蒸氣を作る。

この反応が蓬崑結索の下では著いちじるしく鈍る。

人を守護する蓬崑結索の下で数千年の繁栄を謳歌してきた大都市が、内燃機関となつて小型化し馬力を上げた爛式炉インフェルノを導入できずに寂れていく傍で、剥き出しの外域に新たに築かれた工業都市は隆盛を極めた。

花港フアーゴンは流通の要衝だった。海に開いた港があり、内陸へと続く洪川があり、輸送手段は揃っていた。郊外には平野が広がっている。

この十年で荒野に次々と工場が建ち、海辺の漁村は再開発で倉庫街になり、商業ビルが天を衝いて空を区切る。

ついさっき私は、結界は外域都市の基盤だと言ったけれど。

私たちを必要としない時代が来ている。

からん、と煉瓦壁の上で乾いた音が鳴る。

開いた窓に吊られた提燈ランタンが揺れている。

昼なお淡い光輝を放つ、神髄液の提燈ランタン。

李君の五星カンテラ硝子の硝子管に満ちる魄漿バオジャンは、

光輝を失った神髄液が使われている。

神髄液の光輝は悪蟲バケモノ悪鬼を退ける。

燃料として安価に供給されている神髄液は、列強諸国が南氷洋の白子神ヒトガタを捕るようになるより前は、神位の獣から僅かに得られる秘薬だった。

触れれば皮膚は爛れただ変形する。飲めば死に、命を取り留めれば人ならぬものと化す。

だが、硝子に封じれば、神髄液はその光輝で悪蟲バケモノ悪鬼を遠ざける聖なる燈火あかりだ。

結界ほど広域を覆いはしないけれど、その光の中では人は悪蟲バケモノ悪鬼から護られる。

蒸気で霞んだ眩しい空。薄く青が透ける。

摩天楼も無数の煙突も煉瓦の壁も神髄液の提燈ランタンも廻廊ベランダの鉄柵も翻る洗濯物も、影に沈む。

薄氷の上でも、日は穏やかに射す。

乾物屋の分厚く重い硝子の蓋を箱の底から見上げる、そんな静謐の中で日々が過ぎる。

足下の薄氷が割れるまでは、きつと。

裂け目と結界の境界に触れて、掌に伝わる
渾天杖こんてんせんかんの占環せんかんが回る振動が心地好い。

振り向いた李君が、燦々きらきらした眼で渾天杖こんてんせんかんを見詰めて、呟く。

「やっぱりかっこいいなー」

「五星そ缸れ子も昔は斗君みかどの宝物だったんだぞ」

「今は雑貨屋で売ってるしー」

「渾天杖こんてんせんかん、目盛りしか付いてないんだよ？」

「そこがいいのー。羅盤も星図も全部頭の中にある人にしか使えなくなってるさ、結界を守る選ばれた風水師だけに受け継がれてきたものじゃん、渾天杖こんてんせんかん」

「私は風水師じゃないけれど、ね」

硝子蓋の空。胸の奥がじくりと重く痛む。

「なんで雷姐は風水師じゃないのさあ」

李君は恨みがましく呻くうめ。

「老師せんせいが死んだから」

「じゃあなんで劉先生ラオは風水師なの？」

「別の師匠せんせいを見付けられたから」

劉はいまや花港ファーゴンでは高名な風水師だ。

山ほどの肩書を背負って都市計画に携わり、報紙しんぶんで悩み相談もやっている。

兄弟子も劉おとうとも、老師せんせいを喪っても制度が変わっても必死で道を拓ひらいて地位を掴んだ。

私はそれをせずに、世に出る資格を失った。

八卦師。それが私の肩書だ。

占い師と同義。誰でも名乗れる。

私が結界のお守りを続けられているのは、その地位を得た劉が委託という形で私に役割を回してくれたからだ。

多忙な劉は、弟子の指南も依託してきた。

李君が私と一緒に結界を見回っているのは、そういう経緯だ。

ふうん、と李君が不満げに相槌を打つ。

「雷姐は風水師の仕事をしていたさ、劉先生は肩書だけ立派なセレブでさ、どっちが本物の風水師かって話だよねー」

「君は無知だなあ、李君」
思わず眉間に皺が寄る。

「そう思うなら教えてよ」

むっとしたように李君が言う。

「ちゃんと道を進めばわかるよ」

「いま教えてよ、僕だって劉^{ラオ}先生を尊敬したいんだよ」

真剣に悩んでいるらしい。それは窺える。

李君は利発だ。けれど、清純^{ピュア}で危^{あやう}い。

「こういうのは実感して納得しなきゃ意味がないんだよ。受け売りは大事な時に判断力が鈍るから。信じるのはダメ。見付けないと」

今の正解が来年もまだ正解なのかなんて、わからない。私への信頼は李君の人生には役に立たない。現実を読むことを急った時点で、現実に敗れる。私は負けた。取り残された。

「そんなのさ、なーんにも教えてくれない劉先生から何を見付けろっていうの？」

「そこが見えるのが一人前との境目だから」

「ふうん。雷姐がそう言うなら信じる」

半眼になって皮肉っぽく李君は宣^{のたま}う。
くすつと笑ってしまふ。つい。

李君はぶくうつとほっぺたを膨らます。

ぶはつと吹^ふいてしまふ。つい。

不意に、李君が立ち止まる。

「あつ、ここ知ってる」

赤茶けた煉瓦から灰色の混凝土^{コンクリート}に変わった
その壁にある小さな窪み。

そこに填^はまっている筈^{はつけきよう}の八卦鏡が、側溝
中で割れていた。

「うわー、ひどいことするなー」

李君がしゃがみこんで検分に取り掛かる。

壁の向こうからは元氣な機械音と爛^{インフェルノ}式炉が
蒸気を噴き出す音が響いてくる。

壁に手を当てると、結構な振動がくる。

「李君、李君」

見上げた李君はすぐさま壁に手を当てる。

「これが原因かなー？」

「かもしれないねえ。さて、どうする？」

「士敏土^{セメント}で八卦鏡ごと固める。どう？」

「悪くないねえ、やってみなよ」

「え、えっ？ やっていいの？」

「うん」

眼を円くした李君は、徐おもむろに立ち上がって
五星缸カンテラ子を左手に持ち直し、拳を突き上げる。

「ったああーっ！」

噛み締める万感の想い、といった風に。

李君の、形に残る最初のお仕事。

ああ、いいな。

特別な瞬間に居合わせるのは、いいな。

いつか淡々とこなす作業になるとしても。

だからこそ、私にはとても尊く映る。

路地を出ると、おわっと湿気た熱気が顔に
覆い被さってくる。

「あづいねえ」

アイスキャンデーおご

「雷姐、氷アイスキャンデー磚奢おごってー」

「いいねえ、氷アイスキャンデー磚。自分で買いなよ」

「雷姐に奢やさそばって欲しいのー」

「後で炒面奢やさそばってくれるなら考えるー」

陽炎立つ。

蒸気で霞んだ空。
かあさん やきそば

「媽々の炒面、食べに来なよー」

運河の向こうの麗奔租界ライバンソカイの大楼ビルの屋上に。

並び立つ白煙に混じって、ひとすじ。

油煙墨色ゆえんすみの煙が空に昇っている。

「あれは——」

動悸。冷汗が服の中で背中を伝う。

妙に輪郭がくっきりとした質感。まさか。

「……どうしたの？ 雷姐？」

数呼吸遅れて、李君も息を呑んだ。

「あそこって、あの高さ……」

「結界の外だ。それどころじゃない、拙まずい」

あれは——とても濃い、穢素ワイソの煙だ。

二 穢素の煙

るつぽ 垣塙から黒晶の煤煙が直ぐに立つ。
はくばつ 白灰たる天蟲は此を好む。
かこう 花港は工業都市ゆえに、燐晶炉に用いられ
えびすたま る鯨燐にも黒晶にも事欠かない。
まがつとり 天蟲は臃なる存在、刃を瑳くには可い。
ばさつ 婆娑と濁った羽音が降る。
くがり 玖刈の刃が露帯びて澄み渡る。
まがつとり 玖刈は天蟲を莠る。

* * *

ライバン 麗奔租界を臨む運河に沿って走った。
ハンユニビル 攀縁大厦の入口で干仁に会った。
私の兄弟子だ。
おやくにん 今はお吏で鬼律師の鬼律師を務める。
グイラーフ 仕事柄か、眼光炯々として容貌峭刻。

李君がさりげなく私の背後に位置取る。
干の鋭い眼は殺気を帯びていた。

李君は干を怖がっているのだ。平静を装ってはいるけれど。

私も、干が物騒な物を握っているのを見てぎよとする。

ライフル 鎗。

「玉蘭、穢素の煙を見たな？」

干は眉間に皺を寄せて言う。

「仁哥、状況は？ 何故に鎗？」

「麗奔人の仕業だ。麗奔租界局大楼の屋上で不吉な格好の女が穢素を焚き散らしている」

「何故そんなことを？」

「知らん、興味もない。麗奔租界局は共謀だ。正攻法では手が出せん。手段は鉛弾だけだ」

発想が、汚れ仕事に慣れ過ぎている。

「青真国の官吏が麗奔人を暗殺だって？

冗談じゃない、火種になるでしょうが」

干の鎗に手を掛ける。干は抗わない。

「私がやる」

李君が息を呑む。道服が犇ひしつと掴まれる。御免、干を止めるにはこうするしかない。干から奪うことに成功した鎗ライフルの重みを手に馴染ませながら、私は背後に告げる。

「李君、悪い。先に帰っといてくれるかな？」

「いやだ、行く。雷姐が心配だから」

硬い声。梃子てこでも動きそうにないなあ。

干が倦み疲れた目を李君に向ける。

怯びくつと李君が身を震わせる。

「小孩子は帰れ」

「いやだ」

「李君、劉先生に次第このことを知らせて欲しい」
屹きつと、干が鋭い目を私に向ける。

なんだよう。

「わかった」

低く言つて、李君が身を翻ひるがえす。

「孩子のお守りは大変だな」

幾分穏やかに、干が言う。

「兄弟子のお守りも大変だよ」

櫟すつ、と干が小さく笑う。

攀縁大厦には昇降機が無い。九十九折りの外階段を地道に上る。

「麗奔人は害虫だ」

干が吐き捨てる。

「窮奇ホンテイだよ。善きものは齧かじられ、悪しきものが富を得る。残忍な広莫風だ」

翼の生えた虎、窮奇。北の帝国麗奔はそう

呼ぶに相応しい隆盛で、周辺諸国を齧り取っている。我らが青真国をも。

花港は港一帯を麗奔租界として奪われた。

租界では青真の法は通用しない。青真人は野良犬同然に扱われる。

海風の匂いが濃くなってきた。

街の騒めきが白い蒸気の底に沈む。

煙突並ぶ屋上に出た。

運河を挟んだ正面の一層高い大楼の上。

立ち上る穢素の煙を前に、片刃の矛を手にした白衣緋袴の女が凜と佇たたずんでいた。

三 麗帝の巫

蒼穹を背に、海風に長い黒髪が靡く。

矛の刃は大きく反り、日の光を浴びて濡れたようなぬるりとした艶を湛えている。

緋の唇が花弁のように、灰かに傾ぐ。

慄、と鳥肌立つ。

あれは、人間じゃない。
人間にできる表情じゃない。

「麗奔の女巫だ」

干が云う。

「気を付ける、此处は結界の外だ」

「うん、わかってるよ仁哥」

凝、と空が鳴く。

「天蟲が居るぞ」

磋、と抜剣する音。そうか、鬼律師の提げている七星剣は。装飾じゃない、本物の剣だ。

私は鎗の銃口を麗奔の女巫に向けた。
照星を彼岸の白衣の赤い胸紐に重ねる。
慄々と体の芯が怖気立つ。
肌が粟立つ。
余にも……斯の麗奔の女巫は奇麗い。

白衣が翻る。

割ッ！

女巫の烏い瞳が私を射った。
剝。と怖気が胸を貫いて往く。

手足が震えて照準が乱れる。

澆、と空が凝る。

褻瀆者排除！ 耳を劈く聲が訝する。

緊、と干が齒軋りして呻く。

「……祐弼だ、不妙。一旦退くぞ、玉蘭。
咱們とて心中有鬼の身だ。天蟲が麗奔人を喰って呉れたなら還可以だっ」

空から滲み出た紗は、爪牙を具えていた。
女巫の手の裡で、矛の刃が反されて光る。
天蟲 朶 朶。天意の体现、と云
われている。罪科を責し、人の臍腑を喰らう。

寇仇討伐！ 彎々と金切聲が訝する。

翩々と朶が降る。女巫の直上へ。
空、と女巫の矛が天を衝く。
魄魅、殊に朶は稀薄な軀を有つ。
斬っても透り抜け爪牙が襲う。
その筈だった、凡の武具では。

澆、と朶の軀が雲散霧消た。

吻と、吐息が銃身との狭間で熱く凝る。

あの矛は神器だ。

あの女巫は神器を使い熟している。

女巫は呉を見据える。

膨、と穢素の煙の根元が澱む。
飄と出た朶が女巫の懷に肉薄する。

敗類処死！ 天蟲が叫喚ぶ。

指が引鉄を撃いた。
炮。

弾丸は朶の稀薄な軀を素通りする。
俄、僅かにその動きを鈍らせた。

「朶を撃ったのか、玉蘭っ」

外階段を少し降りた結界の中から、干が引
き攀った声を上げる。

澆と我に返り、背筋が凍る。

天意に鉛玉を撃ち込んだ……。

火薬の匂いが鼻を突く。

嵬、と朶が畝り、裂けた目が私を睜む。

道士譴責！ 天蟲の面罵が耳を

殴打する。

——天蟲が道士譴責を言うか。
はがみ 切齒する。沸々と肚で抗弁が滾る。おまえ
こだま いみもわからずくりかえす 衲衲は
衲だ。不知意味 衲だけの天蟲だ。それが
せいき 天意どころか唯物論者の誹謗でも。
ひら 翻、と衲衲が伸び上がる。大樓の狭間を
ひら 翻、と衲衲が伸び上がる。大樓の狭間を
かぜ 翻々と天意の爪牙が泳ぎ、迫り来る。

びよう 颯！濡れた矛が真一文字に天蟲を薙く。

艶めく黒檀の髪がゆるりと樓群風に踊る。
ポーバン 霧散した魄魅の靄の空隙を烏い瞳が射つ。
ビル 手摺を掴んで大樓の谷間に身を晒した女巫
ストロー は、葦の如く、片手で矛の反刃を擡げた。
きつさき 刀尖が既に肌の内側に在るかの如く、冷たい
い 怖気が心臓を刺して滑り込んでくる。

あなた 「您是……為什麼、這 様？」

私の声が届いたのか。
緋の唇が美しく開く。

「玖刈は神 敵を伐つ可かる」
す 綰、と玖刈が身を退く。
ばけもの 「妖物を斬らば斬らん毎、刃の靈威は増す」
む 噫、と私は 鎗を握り直す。
「其の為に……我々の住む街中で穢素を焚い
て魄魅を喚んだのか」
玖刈の表情は変わらない。

「いかにも」

涼しげな白面は無垢な花卉の如く。

「それなら——いい話がある」

私の黒不溜秋胸中を、知る由もなく。

ふわりと睫毛が烏い瞳に掛かる。

「斬って欲しい鬼がある」

胸の奥に汚泥が滲み、重く溜まっていく。

悟られぬよう、私は真直ぐに女巫を見る。

玖刈の緋の唇が抄と綻ぶ。

「請けよう」

曷っ。爽やかな答に、私は絶句した。

玖刈は 索と背を向けて矛を振り上げ。

穢素の煙を上げる埧塙を、割った。

四 椿と玉蘭

優美な緋の唇に、するりと白い杏仁豆腐が滑り込んでいく。と、睫毛が扇のようにふわりと浮いて、烏い瞳が晶と光る。

こくと動いた細い喉を白い寒天の欠片が滑り落ちて、燦々と五臓を抜ける様を想う。

下町の茶亭で、麗奔の女巫が点心を食べて

いる。目の前の光景に、未だ実感が湧かない。

良葉苦於口の杏仁が糖と乳で蕩ける甜点

の杏仁豆腐になる。是が見たかった。玖刈が

地上の雑踏の中を歩く姿も、甜点を食べる姿

も、全く想像でしなかつたから。

玖刈は白衣緋袴に松葉色の外套を羽織って

現れた。凜とした立ち姿で雑踏を抜けて、当

然のように私の後について席に着き、静謐な

佇まいで杏仁豆腐を口に運んでいる。風や水

が岩を削るように、さらさらと。

「之は、玖刈の椿」

摘、と細い指が屏風に透彫られた花を指す。

椿。冬に咲く、麗奔渡来の花。

ツバキ。舌の上で転がしたその音は滑らか

で強く、彼女の印象と実と重なる。

「我は、雷玉蘭」

椿は清と細い顎を上げて壁の白木蓮の絵

を烏い瞳に映す。木蓮の花。其が私の名。

鮮やかな緋の唇から清水の響きが紡がれる。

「よしなに」

胸に爛と業火立つ。私は彼女に挨拶する。

「拜托您了」

* * *

攀縁大厦の外階段。干は炯と峭刻に睨む。

「仁哥、穢素の煙は止めたよ」

「あの麗奔人と何を約束した」

私は鎗を干の手に返し、告げた。

「麗奔の女巫を撞穴にぶつける」

第二章

八卦師、白介の廢墟で地鬼を討つ。

撞穴

一 痕

19

二 鬼律

22

三 白界域

24

四 鬼哭啾々

28

五 椿の到る処

31

魑魅^{ちみ}たる撞穴^{シュジク}は地鬼^{ちき}である。白介^{ばっかい}の廢墟に棲む。言葉^{ことば}を持たない、瘦せこけ髪をふり乱した鬼とされる。撞穴^{シュジク}の気配^{きはい}は恐怖を喚起する。姿を直視した者は癲狂^{てんきやう}した。撞穴^{シュジク}は結界の聖流に耐える。水中の如く鈍り乍^ならも人を屠^{ほふる}る。撞穴^{シュジク}は神髓^{しんずい}の光輝を嫌うが、耐え、影を辿って接近してくる。撞穴^{シュジク}が近づく時、姿は消えたと云われている。撞穴^{シュジク}を傷付けた道士は同時に自身の同じ箇所が裂けた。撞穴^{シュジク}に屠られた死体は撞木で突かれたように肉は潰れ骨は砕けていた。驅除の試みは悉く失敗し、多くの犠牲者を出した。

花港^{かこう}鬼律府^{きりつぷ}は白介を封鎖し、立入禁止とした。

一 痕 さずあと

記憶の断片。

皮下に霜柱立つ――。

怖気と共に、匂いが消えた。

――の服が凹んでいた。染みができていた。
――が――だ瞬間。道が断たれた。

灼カツと眼が乾いた。直後、眼が涙に沈んだ。

剣先で肉を切り裂く手応えが確かにあった。粘土のような重く粘った皮膚だった。

割カッ。裂けていたのは、自身だった。

肉が圧し切られ、腱けんが裂々ぶちぶちと千切れ、温ぬるく
噴き出した血が滑ぬるりと止め処なく皮膚を流れ
伝う感触は残酷に寒く、目の前が黒ずむ。

深く開いた傷と共に、私は生き残った。

* * *

持ち上げた乳房の下に、ぷつりと針が刺し込まれる。上頬が瘻びくりと歪む。しゆるしゆると皮膚を縫って糸が張る。

李先生の白髪交じりの頭を眺めて、丁寧かつ迅速なその手つきに安堵を覚える。

塞がった傷が再び開かぬよう、補強の糸を入れて欲しい。私の頼みを、李先生は大いに洩バーカイった末に聞き入れてくれた。

「白介に行くんですか」

「はい」

「梓睿はどうなります」
むすこ

「李君は劉ラオの弟子です。劉が他に適切な指導者を見付けるか、自ら指南するでしょう」

「死ぬつもりですか」

「いいえ。そのつもりはありません」

皮膚を刺して滑つるりと抜ける針の痛みが心地好く、綴じた古傷の痛みを和らげる。

「梓睿むすこは小さい頃から此処を継いで医い生しやになると言っていました。物心ついた頃から私について回って、真似をしていました」

李先生の顔が寂し気に綻ぶ。

「この傷を縫って貰った時も李君むすこさんが励ましてくれたのを覚えています。あの頃から、人の懐に入って和ませるのが巧い子でした」

幼い李君は病床ベッドの横からちよこんと顔を覗かせて、目が合うと恥はずかしそうに、擦くすくつたそうに息だけで笑った。無口シヤイな子なのかな。と思っていたけれど、呼吸の度に傷が痛む私を氣遣きってくれていたのだと後にわかった。

「あの後です。梓睿むすこの道が変わったのは。人が傷付き病む前に防ぎたいと私に言いました。劉先生のような風水師になりたいと」

「……はい」

ふっん、と糸が切られる。

「梓睿を見捨てないでやってください」

李先生の、冗談めかせた穏やかな声。

私にはその言葉が重く響く。

新都市が乱立する近年。風水師の条件が明文化され、法律に基づいた資格業になった。

旧来、土木建築に携わる風水師は実績ある地元の名士かその弟子だった。素性の定かでない者が入り込む余地は都会では殆どなく、郷下いなかの出来事は朝廷には見過ごされていた。

新法での風水師の条件。認可を受けた風水師の下で規定年数の指導を受け、試験に合格した者。受験資格は師匠の推薦のみ。

我々のように師を喪った者は、また新たな師の下で一年目からやり直さねばならない。試験の合格者数は決まっていて、毎年限られた枠を争わねばならない。無資格者が風水師の仕事をするれば罪に問われる。

新制度が施行されて、劣巴しろうと風水師の一掃と共に、多くの結界管理者が役目を追われた。

劉はその制度に従って風水師になった。

干は官吏の道に分け入って進んだ。

私は一步も動かずに制度の穴から零れ落ちて、制度の穴からまた劉ラオに拾われた。

診察室の奥から李家の居間を覗くと、卓子テールに突っ伏していた李君が煽がはつと顔を上げた。

「雷姐、終わった？」

「うん、お待たせー」

「どこか悪いの？」

「頭かな？」

「そーゆー冗談、不喜きら嫌だなー」

脹ふくつと頬を膨らすから、つい笑ってしまふ。

「顔に墨ついてるよ」

「え、どこ？」

「おでこ。蒼そう頤けつみたいになってる」

刷べたつと増えた眉毛を濡らした手巾タオルで拭つて

あげると、ぎゅーつと目を閉じていた李君が、不意にはちつと目を開けて言う。

「雷姐、これ見て」

卓上の紙には綺麗な線で絵図が書き込まれていた。あの路地ちうらを境界して気脈の清流を通す方法が、網羅的に検討されている。

「いやー、さすがだねえ李君！」

あの壁に新しい八卦鏡はっけきようを入れ直す方法の他に、境界石を用いる方法、策さくと鈴りんを用いる方法、神髓灯を用いる方法、其他諸々。

「すごいねえ、惚ほれ惚ほれするよお」

「如何ど方法れがいいと思う？」

「境界石だね」

「あ、矢張やっぱり？」

筆を取り、伺ん？ と李君は首を捻る。

「珍しいね雷姐、答を教えてくれるなんて」

「そーかなー？ 私そんなに意地悪だっけ？」

「いつも自分で考えろって言うじゃんー」

「いやあこれだけ考えたら充分だよお」

李君はさらさらつと境界石の項の左上に木蓮の花を描く。玉蘭わたしのお墨付き。正直照れる。

「絵も巧いねー」

「今日は褒めてくれるねー雷姐」

満にんまりと笑って、李君は吸きゅーつと伸びをする。

「ちよつとお散歩に行かない？」

「行く！ 爸とうさん々、一寸出掛ちよつとけてくるねー」

窓の外は、ぬるい風が吹く薄曇りの空。

バイジエ リーベン
「白介に麗奔人の死体が転がれば、麗奔人共
も畏れを知るだろう」

カッ
灼、と頭の芯が毛羽立ち、胸の奥が煮える。
「椿は——麗奔の女巫は、そう簡単にやられはしない」

私の喉からは酷く冷えた声が出る。

ツァイセンせい
「蔡老師よりもあの麗奔の方が賽 過と

言いたいのか」

殺気立って
峭刻に干が喉の底から囁く。仁哥の声は私の奥を直に裂いていく。

あか ぬいあわせたところ
赫く、胸の下の傷痕が血を溢す錯覚。

かのじょ ホンサン
「玖川椿は凶神を伐つと言った。鬼だって
ハ喇だろう」

カッ
溢れる血が爛々と痕を燎く。

炯と、干の眼が虚ろな光を宿す。

「——雷玉蘭」

遠い鐘の音に似た声音。官吏の国語。

「寇仇に擁護する内 奸は排除為ねばなら
ない。迂闊な事は言うな」

「これくらいで内奸だって？」

かさつ てのひら
干は隼と掌で右目を覆って、囁く。
「咱は鬼律師だ」

ぞく
慄、と背筋が寒くなる。干の眼の彼岸から
覗く、深く濁った水の気配に。

ひと ばけもの
人と凶神、哪個の朋友だ、と舌の上に乗っ

た言葉を奥歯で噛み砕いて呑み込む。

魄 ぞら
魄魅たる天蟲の粕匂は私に言うだろう。
麗奔と青真、哪個の朋友だ、と。

* * *

絢爛たる花港の夜景に黒き穴あり。

撞穴なる離末の棲まう白介域なり。

かの離末の跋扈に因りて白介に人住まず。

撞穴に謂われなし。生り出るの伝なし。

撞木の大力もて骨穴を砕くが由縁なり。

雷道士曰く、撞穴は地 鬼なり。音なく侍

り、姿なく歩む。剣もてかからば、粘土の手

応えありて、己の身が裂けり。
痛ましき傷なり。心苦しけれ。

三

白界域ばっかいいき

白バーカイ介域に近付くにつれて街の気ふんいき囲は荒すさみ、古びた壁に異常な密度の神まよ髓灯けが連なる。

不意に、碧そら空が開ける。

大ビル楼の崖に囲まれて、荒廃した低層の建物ビルが連なる一帯が現れる。打痕あなの如く。

地デイグワイ鬼の侵入を防ぐ為に、派手に塗られた方格模様の壁に無数の眼めだま睛が描かれている。

境界を塞ぐ板は咒符ふだで覆われている。色褪うせせた咒符の上に真新しい咒符が貼られ、風に翻ひりひり々と蠢うごめいている。

白こ介に入った時、私は虞おそれを知らなかった。白介こから出た記憶おぼえは無い。李先生の病床ベッドで目覚めて、今に至る。

乾からん、と椿つばきが一本歯の下駄を落として挿すと跣足はだし袋はだしたびを脱ぎ捨て、白はだし素足を滑り込ませた。一段背ひとさきが高くなり、峻岳しゅんがくの壮麗然さが漂う。

椿は赤い盃さかずきのかたち状の兜布とぎんを額に被ると紐を黒髪くろに潜うしろらせて後頭うしろあたまで括くくる。

壁に凭もたせた袋には濡れた片反刃かたそりばの矛ほこ、薙刀なぎなたが封じられている。薙刀袋れを手に、椿は汚れた石畳を蹴ひしめって咒符ひしめ轟く封鎖板に翔ひらりと跳び乗った。

広い碧そら空に漆黒の髪と白衣が舞う。空を飛んでるように私には見える。

下駄の一本歯が躍ぎゅつと風に蠢く咒符を踏みつけ、烏い瞳くろが見上げる私を映す。

虚心まっすぐな眼差しは只見極めようとしている。私がこの境界を越えるのか、留まるのか、と。

私は封鎖板に手を掛ける。色褪せた咒符に足を架け、体重を乗せる。

疼ずき、と胸の下すつの傷に沿って痛みを錯覚おぼえする。添たお、と嫋やかな白い手が差し出される。

椿の烏い瞳の中に私が居る。緋の唇が優美な弧を描く。私は椿の手に触れ、握る。

冷たく、勁つよい手。

私は、境界を越えた。

腐臭が蒸して羽虫が飛び交う。

砕けた石畳は砂利交じりで草生して、
向陽処は高く繁った草が地面を隠す。

瓦礫混じりの路を、椿は一本歯の下駄で
割々と軽快に歩く。

不意に振り向いて、緋の唇の口角を上げて
涼し気に言う。

「此れなるは天狗下駄なり」

「天狗？」

「白頭猫に非。憂流迦に非。魔道に墮

した修験者なり」

呵、と天狗下駄を響かせ、続ける。

「天翔け妖力もて里人を弄う」

流麗に謡う、些少に俏皮活な緋の微笑。

朽ちた廢墟は見知らぬ場所のようだった。

私の記憶にある此処は、留守宅の気配がし

て、人が消え失せた寂しさがあった。

歳月に呑まれた此処は、人の跡が剥がれ落
ちて風雨に朽ちる構造物の群れた。

渾天杖を翳すと、占環は乾々と回った。

此処はまだ気脈の清流が流れている。

——撞実の動きが少しは鈍る筈だ。

「雷道士」

「——」

咄嗟に返事が出来なかった。

今は聞くことの無くなったその響き。

道士。私がなりたかったもの。還の数年で

意味が豹変した、今では故弄玄虚を意味する

言葉。老師が、烙印を押されなかった最後の

道士だ。

麗奔人の彼女には、青真の情勢など知る

由も無いだろう。

那个錯、我是八卦師。そう答えるべきだと

魄魅が訝する。

眩暈めまい。

明と暗が薙刀の柄を境界に交錯する。

「懸けまくも 畏み御名も判らじ」

椿の柔らかな声が響く。

地鬼の散乱髪が椿の頬を掠める。

「御身に呼気なく声もなし。宣りごと如何に賜わん」

炎と後ろに仰け反った撞突が旋と掻き消え、十歩離れた低木の陰に現れる。

「道士」

椿の背が寄り添い、背中合わせに立つ。

「是」

私は背囊を掴み、設置用神髓灯を眼前に掲げる。光輝が燦然と目を射る。

背に椿の熱を感じる。撞突を前にしているのに、大樹の底下の安心感に包まれている。

「撞突を斬るは難し」

「知道了什麼？」

「撞突は腕揮い居り乍ら此所に不在。他所にもなし。何所に在りや？」

慄々、と左脇腹が痙攣る。躑々と胸の下の傷痕が擦痛く。

把ッ！

骨張った湿い巨大な手が。神髓灯を掴む。不_{ありえない}会、鬼が光輝を掌握るなんて……！

「道士！」

初めて、椿の焦った呼声を聞いた。裂。白濁い罇が光輝放つ硝子管に伸びていく。

光輝すら無効なら奈何——。

神髓灯が破碎けた。決。神髓液を浴びた鬼の手は——。

爛ッ！

千の棘が突き刺さる——灼け爛れる。

冷感すら伴って顔の皮膚が煮える。沸く。

密と閉じた左目の瞼が灼け眼球が炙^{あぶ}られ

亀^{きつこう}斑に破裂していく右眼に、淫^{くろ}い鬼の

掌^{かのひら}が翳^おされ——前髪が圧される。

岳^{ガンツ}！ 釵^{はがね}の旋風と柔^{ふわり}と舞い触れた衣^{きぬ}。

「去^いねッ！」

椿の絶叫。視界が暈^{ぼや}け、闇の帳^{とばり}が降りる。

開いた左目に、日を翳^{ガッ}して艶めく椿の長い

髪と濡れた刃^{ぐるん}が——凹^{ガン}ッ！ 歪^{ガン}ッ！ 曲^{ガン}ッ！

廻^{いしづき}と柄を回し、鐵を突き込み。

「懺^やアッ！」

蹂^{ガッ}と椿の天狗下駄が砂利を蹴^{にじ}る。

体を曲げた椿が、呼^{かつ}、と苦し気に息を吐く。

椿の構えた薙^へ刀は。刃^がが。

乾いて、凹^へみ、歪^{ゆが}み、曲がっていた。

四 鬼哭啾々^{きこくしゅうしゅう}

直^すぐ左脇、老師^{せんせい}を、撞^{ツオンユク} 突^ての掌^{かのひら}が衝^つく。

ぼと、ぼと。地面に毀^{こぼ}れる。びちゃ。老師^{せんせい}

の——肉片。

厄介^{えきがい}だなあこいつは。余裕の笑みで。

出来ねえ事なんざあ無いんだよ。毅然と笑

みを浮かべて。だから精進しろ。と。

——言葉もなく。老師^{せんせい}は逝^いった。

* * *

がざっ。爛れた顔が毛羽立つ。

がががざっ。猛烈な痒み。頬を突き破って

瘡蓋^{かさふた}が押し出される。

触れた頬は毬栗^{いぐり}の感触。

傷口を直^{じか}に圧^おす激痛。

頬から零^{こぼ}れる。扁平^{へんぺい}で硬質^{こうしつ}な……鱗^{うろこ}？

「——然様か」

椿の乾いた声が脈動する耳の奥に届く。

「道士、如何に」

息を呑む音。

暈た視界に、見下ろす椿の緋の唇が鮮や

かに浮かび上がる。揺らぐ鳥の瞳に映る

醜怪な異形の顔。

犇列と松毬のように生えた血肉交りの鱗、

臉が融け崩れた右の白濁した眼、爛れた肉塊

から生える今朝櫛を通したばかりの髪。

神髄液で爛れ変質した雷玉蘭の貌。

此が私の姿だ。

溢れる涙が爛傷を抉るが如く沁みる。

「对不起」

「縲うな」

初めて、椿の声が乱れる。

「死に給うな、雷道士」

強く。椿の声が響く。

「……呵」

詰まった喉を穿って声が滑り出る。

椿が故国を離れ身命を賭して鍛えた刃は、

私の所為で損なわれた。それなのに。

私は復讐の為に椿を利用した。それなのに。

曲がった刃を撞突に向けて、椿は云う。

「玖刈椿が仕う奇眼一連は独眼龍神」

鱗毛羽立つ毬々の頬に椿の手が、触れた。

「不行、汚い……」

強引に顎を擡げられる。鱗が椿の指を切り、

圧されて肌の奥に挟り込む。喉を血が伝う。

空、と半眼で撞突を一瞥した椿は。

「守給え」

烏い瞳に私を映し、静謐な気配を帯びて。

私の爛れ落ちた唇に、柔らかな唇を重ねた。

爛傷を躍る舌の鈍い痛みが甘美に響く。

血の味で満ちた口の奥深く、舌の付け根ま

で椿の舌が侵入してくる。静かな呼吸のまま。

心臓が高鳴る。喉が空々と通った。

噛。硬い音。椿がなにかを啜えて頭を退

く。擦々と喉の悶えが取れていく。

鉄くろがねの味が口いっぱいに広がる。

椿つばきが啞おえて私の喉から引き出していく物体もの。

は、硬つかがしらく、太く、重く、長い——裸ぬきみの剣。

柄頭つかがしらの環わを歯で噛み提げて、椿は上目遣せいぜついで凄絶ひに緋ひの口角こうかくを上げる。

滑ぬるり、と刃先が唾液引いて舌の上を抜ける。

響くわん、と椿の啞おえ提げた剣が鳴く。

涅くろい剣。私の胸中の如く。撞穴つうけつの舐なの如く。

ぼろぼろと涙がこぼれる。

胸すうすうが颯爽おえつする。

嗚咽おえつが喉を衝く。

堰あいじようを切った哀情あひじようが喉から溢あふれ出て、体の

内側を切り裂いていく。

血あふが、涙が、溢あふれていく。

流れ出る。

老師せんせいの姿が。鮮明せんせいに浮かぶ。

その度に、涙かたまりの塊こぼが零れる。

ぼやけた左目の視界で。

ツォンユク
撞穴つうけつが揺らいでいた。

「アアアアアアアアアアアア——！」

叫喚こえが。私の喉から迸ほとばしる。

「聞食きこしめせ、御身の息吹こえ」

椿つばきが撞穴つうけつに謡うたう。

極寒ごくかんの慟哭どうくが湧く。舐なを激情が吹き抜け、

鱗うろこが逆立つ。

虚こゝろろな凝りはらが肚の中心に蟠わだかまる。

椿つばきは涅くろい剣を握り、私の鳩尾みぞおちに突き付ける。

「罪穢つみけがれの衣ころもを脱ぎ去り給え」

切すつと細めた椿の清廉せいれんな眼に釘付けになる。

舐なの芯おぞけに怖気こゝろこつと恍惚みが充ちる。

撞穴つうけつの意根こゝろが私と重なっていると判わかる。

——憎恨きえたくな消失——想去らくにな涅くろ槃たい。

刺くろ。涅くろい剣が鳩尾に挿し込まれる。

鈍く心地好い痛みと共に、切々と蟠わだかまりが

解けていく。

「——執アアアアア々呵アアアアア々啾アアアアア々慚アアアアア愧アアアアア刻アアアアア々憤アアアアア怒アアアアア轟アアアアア々——！」

撞穴つうけつが解体されていく。

私は剣を握る椿の冷たい手に、手を重ねて
鳩尾の奥へと押し込む。生々しい感覚。

柄頭が鳩尾に埋まる。

塵、と撞突の躰が崩れ、土煙が立つ。

涅い剣が私の躰の中に納まる。

石畳の上には、涅い土塊が散らばっていた。
颯、と風が土煙を吹き散らす。

「平げく安げく大元の御霊に帰り混沌の始
を守り給え」

椿が柔らかに謡い、乾々と禹歩を踏んで、
曲がった薙刀で掃と空中を薙ぐ。

「厄の災を祓給い退給いて守給い
幸 給えと恐み畏み申す」

降と屈んで礼拝する。

斯くして、撞突は除かれた。

五 椿の到る処

窓からぬるい風が吹き込んでくる。

逆立った鱗が乾々と揺らいで傷が疼く。

李先生の診療所の病床で微睡んでいる。

扉が開く音に怯と躰が竦む。

頬を血が垂れる。

静かな足跡。椿だ。

「雷道士」

凜とした響きの柔らかな声。

白い屏風の陰から椿が姿を表す。

お盆に李家の棚で見た椀を乗せている。

椀の中には蜜に浮いた琥珀色の酪。

「和き愛玉子を」

睫毛で翳った烏い瞳が私を映す。

「我喜愛的食物」

柔と緋の唇が綻ぶ。

椿は匙子に掬った酪を口許まで運んでく
れて、そつと首を傾げる。まだ夢の中なんだ
ろうか、とふと考える。口を開けるとつるん
と注ぎ込んでくれる。燕の雛になった気分。
とろり、と蜜が口の中に満ちる。凹凸の唇
から唾液が垂れて顎の鱗に絡む。

舌で碎いた酪が喉を滑り落ちる。
心地好い。

店に食へに行くことは、もうできないか。
しくりと胸が痛んで、熱く溢れた涙が伝う。

「いたわしや」

「这是个悪報」

覚て、元の躰で、撞突は白介に在ったと
したら。私は——また椿に縋っただろう。

「如何報いを受けたとしても、あなたの神器
を壊したことは贖いようがない」

「さにあらず」

掠れた声で椿は言う。

「玖刈の刃を毀つは、己が恐怖ゆえ」

直、と顎を上げて、真摯に言う。

「撞突は歪みなり。水切りの如たる歩みは波
紋の連故に。恐怖を呼水とし現る力なり」

そして、案と考える仕草をして、続ける。

「撞突は禍、曲つ。貴女の剣は祝、直つ」

禍に触れて顕現した涅い剣が瑞ならば。
「禍福糾纏？」

私の戯言に、椿は噓と緋の唇を歪める。

「龍神の靈驗なるべし、奇眼一連にもがな」
言つて、払と力なく微笑む。

神髓液で糜爛して変異したこの体にそんな
意味が与えられるなら。

「私が尸解するなら、涅い剣が残るんだね。
そしたら、龍になって椿と一緒に行くよ」

心地好い戯言。

椿が和と目を細めて、私の頬の鱗に触れる。

「畏かりや。心強し。されど——なるまい」
「妳為什麼那樣想？」

椿は私の鱗立つ頬を撫でて、言った。

「神敵を伐たば相果つる。然もなくば毒が
同胞を殺す。玖刈は崩る宿命の刃なり」

第三章

神和ぎ、洪川の水門で水神を爍かす。

餓臥

一 飛礫

34

二 供犧

37

三 臥龍

40

四 爍す

43

五 後日譚

47

魍魎もうりょうたる餓臥ががは水神すいじんである。洪川こうせんに仰臥ぎようがして水難者こんぱくを魂魄こんぱくまでも食い尽くす。洪川こうせんに投げ入れられた死体かこうきりつぷが上がることはない。現在かこうきりつぷは花港鬼律府かこうきりつぷとの契約により水運の護神となっている。花港鬼律府は餓臥ががに奉ずる犠牲の徴発権を持つ。餓臥ががは奸賊を生贄に要求する。これにより花港行政は罪状なく不穩分子を処刑することができる。

一 飛礫

三鱗重工花港支所にて、外務省調整官
伊都原吠えて曰く。

「田分け者ッ！ 玖刈は汝の持遊に非ず也、
玖刈失くして如何九十九をば斃すかッ！
天下平定の大命を何と心得るッ！」

玖刈椿は言う。

「凶つ威なり。蛇行剣の威容を得ん。荒神
を平らぐによし」

伊都原、息巻きて言い捨て帰る。

「玖刈など無用、九十九とて万の兵もて
かからは散らん。民草徴せば兵尽きること
なし」

いとあさまし。

* * *

「我回来了ー」

李君が結界の巡検を終えて戻ってきた。

頭巾を被って藤の屏風の隙間から見ると、

李君は五星缸子を卓に置いて、濡れた髪か

ら額に垂れる滴を袖で拭っていた。

「没有異常だったよー」

声が少し洩れている。目の周りも赤い。

「どうしたの？」

「没設麼事儿」

濡れた声。屏風から出ると、李君は唇を硬

く曲げて潜々と涙を零していた。

「被欺負嗎？」

揺々と李君は首を横に振って後ろを向く。

卓についた小さな手に垂々と涙が落ちる。

肩にそっと手を置くと、李君は背中を丸め

て攣々としやくりあげる。

背中をゆっくり撫でると、李君は暫しの間、

堰を切ったように咽び泣いて、少しずつ呼吸

が治まってくる。

閑静な過晌。公寓の外を通り過ぎる人の

声が聞こえる。……すぐ庭先から。

「こんな所に蛇女がいるのかよ？」

「いるね、ぜーったいにいるから」

「なんだよその自信の根拠はよお」

「皆言ってるんだしタダの噂じゃねーから」

「いたらお前が真っ先に食われるな」

「その前にこの鉄鎚かなづちでぶっ叩いてやらあ」

……また傻瓜ばかが来た。

李君が顔を上げた。磨ぎ、と齒齧はがみする音。

……優しい子だなあ、李君は。

掌々ほんほんと李君の背を叩いて、見上げた李君に指を唇に当ててみせ、浮フアオジョ足で窓に寄る。

「窓開いてるぜ、覗いてみろよ」

「いやおかしいだろお前が覗けよ」

「信じてねえんなら覗けるだろ」

「てめえのその鉄鎚かなづちは飾りか胆小鬼チキンやろう」

舌打ちして棄べつと唾つばを吐く音。

窓の隙間から担心おっかなびっくり害怕の眼が覗く。

そこからじゃあ何も見えないよ。

軋キイ、と窓が動く。怯びくりと傻瓜ばかが慄おのく。

鉄鎚かなづちを固ぎゅっと握る手に、報しかえしじゃ。練りに

練った唾を吹き矢の要領で放つ。

粘着びっちゃ。

「うわああああああああああっ！」

「ぎゃああああああっ！」

「でええええええ蛞蝓なめくじッ！ 蛞蝓なめくじッ！」

顔を晒さらすまでもなく。狼狽ほうたう不堪地のていで、傻瓜ばか

は逃げ去った。

くっくつと笑いが込み上げる。

「いやあ、なんで蛇女の家から蛞蝓なめくじが飛んでくると思ふかねえ？ いいけどさー、どんな

幻覚を見ようが勝手だけどさあ」

腹を抱えて笑う私を李君は哀しげに見る。

「雷姐は……撞^{ツオンユク}突を退治して白介^{バーカイ}を取り戻したのに」

「ん？」

「こんなのおかしい」

「いやあでももう住民も居ないし、取り壊されて麗奔^{ライバン}の廠子^{こうじょう}が建つだけだし、青真^{チンツァン}の為にはならなかったよ。喜んでくれた人は居るし、三鱗^{サンリン}重工から礼金も出だし、私も復讐^{ふせん}が果たせたから。充分だよ」

李君は憮然^{ぶぜん}と押し黙って私を見上げる。

「そもそも撞突を除いたのは椿だから。私は案内^{ざん}しただけ」

李君は悩^{ざゆっ}と眉間に皺を寄せて呟く。

「あのひと、嫌い」

「麗奔^{ライバン}人だから？」

李君は小さく首を横に振る。

「私がこうなったのは自業自得^{わたくしがわるい}なんだよ？」

椿は私を助けてくれたんだ」

「あのひとに会わなかったら、雷姐は」

「一人で撞突に挑んで死んでいた」

「嘘つき」

「……嘘じゃあ、ないんだけどなあ」

李君の唇が震えている。

「李先生の病床^{べッド}の上で君に初めて会った時から、ずっと私を縫い留めていた棘^{しゅじく}なんだ、

撞突^{しゅじく}は。私は漸^{ようや}く生き返ったんだよ」

吃^{くっ}、と齒を噛み締めて、細く息を吐いて、

李君は言う。

「……僕が知ってる雷姐は、ずっと死んでいったっていうの？ ……それなら、っ」

「死んだままでよかった、？」

李君は苦しげに眼を細めて、振り払うように強く首を横に振る。

「優しいね、李君は」

肩に手を置いて、そっと指先で促すと。李

君は私の胸に顔を埋めて、呟く。

「雷姐の莫迦^{ばか}」

ぽん、ぽん、と指で肩をゆっくりと叩く。

「ありがとう、李君」

李君は顔を埋めたまま、浅く長い息を吐く。

と。

通りから。琳リン、とうら淋しい鈴の音が響く。

縫ぎゆつ、と私の袖を掴む李君の手が強張る。

倒ばたん々と近所の家々が戸や窓を閉め切る。

鬼律師きりつしの鈴の音だ。

洪川ホンケンには水神スイサンがいる。花港鬼律師府はこの巨

大な魍魎ワンレンに人を捧げること、辛うじて水運を成り立たせている。

また、生贄いけにえが選ばれたらしい。

死を告げる鈴の音は通りを静寂に沈めた。

響く鈴の音と静寂の中、李君と私の静かな

呼吸音が部屋に満ちていた。

近づく鈴の音が、止まった。

「雷玉蘭」 レイユラン

遠い鐘の音に似た声音の、官吏みやくの国語ことばの、

鬼律師——干——仁哥——干仁ガン・レンの声。

水神に捧げられる贄にえは。私だ。

二 供犠くぎ

開け放たれた扉に立ち塞がる、鬼律師。

不吉な白の長衣は鬼律師の儀式服。

帯剣たいけんして、縛縄ばくじょうを提げている。

陽に輝く冠の下顔色は青白い。薄い唇は

色を失い、炯々けいけいとしていた眼は澱み、峭刻しょうこく

な顔は焦燥の色が濃い。

琳リン、と外から淋しい鈴の音が響く。

この家はもう、鬼律師に包囲されている。

ひく、と李君が息を呑んで私にしがみつく。

私はそっと李君の背を撫でる。

「呵」 はい

水神餓臥がごは内奸うちけんを生贄に指定する。

咱おれは鬼律師グイリッだ、と右目を覆って言った干の

向こうで、水神は私を品定めしていた。

「李君、頼みがある」

「なに」

涙で濡れた小声で李君が氣丈に応える。

「干、仁を恨まないで欲しい。干も亦、花港を護る機構に身を捧げた仲間なんだ」

「……え？」

「劉はこの後、境界守りの役割を君に任せるだろう。君にはその実力があるから」

手を伸ばして渾天杖を取って、李君の掌に置いて、重ねた手で握らせる。

「後を頼んだ」

李君の眼に力が籠もる。ぎゅっと渾天杖を握り締め、背伸びして、李君は囁く。

「逃げなきゃ」

それもひとつの手だ。けれど。

「試したいことがある」

鬼律師の集団から逃げるのは難しい。私が逃げ切っても、餓臥は私に近い誰かを、李君や劉や干、仁すらも、生贄に求めるだろう。

——李君はまず逃げ切れないし、劉は荒事

は苦手、干は唯々諾々と食われそうだ。

大きく目を見開いた李君に、私は言う。

「李君、君は賢明な子だ。どうすればいいか、君は知っている」

「……わかった」

「いい子だ、李君。元気で」

頷いて、李君は鋭と干を睨むと、駆け出す。

干は影の様に左と脇に寄って李君を通す。

庭を抜けて、走る李君の小さな背中が門から出て通りに消えるのを見送って。

「待たせたね、仁哥——鬼律師干、仁」

「別れは済ませたな、——雷玉蘭」

「令状は？」

干仁は白い召喚状を突き付ける。

硬い筆跡で私の名が記されている。雷玉蘭。

「仁哥が書いたのか」

「そうだ」

「辛かっただろ」

「これが咱の役目だ」

「偉いね、私には真似できない」

干が縛縄と白い布を手取る。

「待った。縄を掛けられる分には抵抗するつもりはない。だが、その布を私に掛けるつもりなら……抵抗する」

「晒し者になるつもりか」

「誰にも知られず食われるなんて御免だね」

「そんな姿で記憶されたいか」

「これが私だ、仁哥」

「皆には美しい姿を遺してやれ」

「断る。欺瞞は許さない」

「ならば」

干は冴と目を細める。

「お前が蔡老師を焚きつけて撞突退治に行

かせた事も触れ回るか？」

胸の奥で、淫い剣が冷たく形を示す。

「唉。私は老師を死地に誘った」

「認めるのだな、玉蘭」

「……是」

深々と歎息して、干は私の手首を掴む。

「その醜い姿を衆目に晒すがいい」

緊く。後ろ手に縄を掛けられる。

干はずっと私を罰したかった。

私はそんなことにも気付かなかった。

「玉蘭」

干は袖から手を入れて私の腕をなぞる。

袖の内側に留めていた鏢を抜き取られる。

「やはり、お前は油断ならない」

「こんなものが餓臥に効くもんか」

裾から手を入れられて、太腿に留めていた鏢を抜き取られる。

「奴の不興を買うわけにはいかん」

「餓臥に情が移ったか」

「否。咱は——」

餓臥を減ぼしたい。できるものなら。

唇の動きだけで干はそう言って。

「行くぞ。雷玉蘭」

私を引っ立て、戸口を出る。

鐘と近くで清めの銅鑼が鳴り響く。

鬼律師に囲まれて、私は水神の許へ往く。

三

臥龍 がりゅう

水の匂いの風が吹く。

運河の始点、洪川ホンの煉瓦れんが造りの水門。

餓臥ロウロウはそこで贅を取る。

泥の色の濁った水が乱れ畝うねり流れる。

遙か上流で薄曇りが裂けて、光の幔帳カーテンが川

面を煌めかせている。

此処はまだ曇天の下。

水門には贅えいを奉げる為の棧橋さんばしがある。

沈んだ色の煉瓦の際きわ。足下には澱んだ濁流。

此処が私の人生の終焉しゅうえんの場所か。

「餓臥ロウロウと話がしたい」

鬼律師ウーウオ干仁こんばくが陰鬱いんうつに言う。

「餓臥は魂魄をも喰らう。永遠に話ができる」

「私が私であるうちに、だ」

「命乞いか？」

「そうなれば幸いだけれど」

鼓ハツ。と濯せせら嗤わらう聲が響く。

「洪川ホンチュインに臥す水神餓臥か。ご指名の饅ごちそう、

雷玉蘭ライギムランだ。祝一路平安」

跪ひざまずいて叩頭する。縛ばくじょう縄が食い込む。

好よし。来こい。上機嫌な聲が響く。

「高寿博識の水神餓臥に指教を請いたい」

肉このにくをつきおとせ 杵き。にべもなく餓臥は言う。

身動カンぎした干を眼で制して、私は言う。

「尊あなたさまは悲の苦味ばかりで、悦ユイの甜味はご

存知ないとみえる。私をその智慧で満たして

くださったなら、悦ユイの甜味テイインに満ちた人肉を

味わって頂けるのに」

フツ
と餓臥が喰う。

スイサンロウロウ
「水神餓臥に問う」

姿勢を正して、私は声を張る。

「この私の推測は正しいか。」

柏訝は訝。天の威を借りて響く人心。

撞突は訝。地に沁みた声なき人心の残響。

ならば餓臥はなにか」

蕩、と泥の色の川の底で淫い影が蠢く。

「餓臥は訝。濁流の如き狂奔する人心」

我
訝？
在爾们未早我在這裡。

「人が来る前から 尊は餓臥だったのか？」

否。
爾们称我餓臥。責める響きの聲。

「ならば、 尊の真の名は？」

我失名。
聲の底に哀愁が滲む。

「尊の飢餓は餓臥ゆえにか？」

我忘却。
聲の底に苛立ちが滲む。

「可憐に」

私は小さく息を吐いて、続ける。

「尊は人との付き合い方が巧い。

花港が栄えれば人は増える。

そして、世が乱れれば多くの死体が洪川に

投げ込まれる」

淫い水底に、私は問う。

「尊はいま、局面をどちらに動かそう

となさっているのか」

屈々、と餓臥が喰う。

不告訴。
強圧的な含み喰い。

「仁哥。だ、そうだ」

見上げると、干は虚ろに答える。

「我知道」
しっている

「なんだ、そっか」

「先に逝け、玉蘭」
ギョ克蘭

干は諦観ていかんの面持ちで囁くように言う。

「咱もじきに逝く」
おれ

「なんだそれ」

憮わ、と歪めた頬ほを、干が毛羽立った鱗の上

から柔々むにむにとつまむ。

「因果応報だ。こうして落としてきた奴には

家族も仲間も居る。権威が失せれば報復が待

っている」

まるでそれを待ち望んでいるかのように。

干は。仁哥ヤンにいは淋しげに微笑む。

ふい、と私は首を振って頬に体温を伝える

仁哥ヤンにいの指を振り払う。

「自虐に付き合わされるのは御免だね」

立ち上がって、私は洪川ホンの濁流を背に。

「私を突き落としたその手の感触に縋って死

ぬつもりだろ、莫迦ばーか。そんな自虐じぎやく疼ネタにされて

堪たまるか。私を見ろ、仁哥ヤンにい」

慄ぞくぞく々と怖気おぞけが体を貫く。手足が冷える。
撞ツ突はもう居ない。役目は李君が継ぐ。

私は自由だ。だから。

炯ギッ、と仁哥ヤンにいの眼に光が灯ともる。

浮ふわ、と軀からだを風が包む。

—— 椿かのじよ。神を伐つ、美しい女巫ライマオ。

椿このと出逢さいごえたのだから。

此处が終焉でも、満足だ。

洪川ぼしやんの濁流の音が大きくなる。
没。

濃厚な水の奔流ほんりゅうに吞まれ、直後。

粘ねばつく巨大な顎あごに、食われた。

四 爍す

急報来たる。

軫び馳せた李医院の童曰く、雷玉蘭、
水神の供儀となる。

餓臥の称に覚えあり。洪川に臥したる
暴神なり。

玖川の露と為すに相応しき岡両なり。

玖川の凶相を示す機なり。

天狗の装なれど、駿馬に劣る。

雷道士の危機なるに。

椿は何故天駆せん？

* * *

鑢で全身が削られていく。

折。碎。衝撃と共に体感が失せていく。

おなががすいた。

臓は既に無いのに。

臍が空いた。透いた。漉いた。

滋味が溶ける。旨い。甘い。美しい。

光輝湛えた精髓の風味を帯びて龍相注し、

鱗が爛肉に混ざって膿の甜味が香る。

穏やかに風いだ魂魄が裂と沁みる。

礫。砂。骨を噛み砕く。

魂に芯がある。湿い土気と金気が凝る。

鋸齒を立てても折れず、やむなく呑む。

磷と焰立つ。

——椿、椿、わたし、あなたみたいになり

たかった。

——椿、椿、わたし、あなたのそばにいた

かったの。

——椿、椿、わたし、あなたがだいすきな

の。

——椿、椿、わたし、あなたがほしい。

魂の炎は飢餓に吞まれる。

——椿、椿、わたし、あなたが食べたい。

* * *

洪川こうせんの水門きりつしに鬼律師かの姿あり。

雷道士らいぎよくらんの姿なし。

「雷玉蘭は如何に」

号して問えば鬼律師答えて曰く。

「既に亡ない。骸むくろも魂魄こんぱくも残っていない。水底みなそこ

にあるのは餓臥がのみ」

斬きるべきは鬼律師かに非あらず。

雷道士らいぎよくらんを食くらいし暴水あらぶるかわのかみ神なり。

* * *

——椿のこえがする。

——だいすきな椿のこえがする。

——すぐそこに椿がいる。

——椿をたべたい。

* * *

洪川沸き立つ。

泥滴散どろしずくらして罔両現もうりようあらわる。

渾くろき巨軀は藻で覆われ、森山の如在ごたる。

裂け開きし大顎は胴の半なかばを刻み、数多連あまた

なる牙は鮫さめの如し。

椿つばき。罔両潺もうりようせらいで啼なく。

「誰たれの言葉ぞ」

玖刈くがりの凶相まがつすがた、椿わたしと同おなじく。

椿つばき。罔両泥水溢もうりようどろみずこぼして啼なく。

「許ゆるさじ」

掛刈かかる。

水に逃のがせは為なす術すべなし、幸い罔両退もうりようひかず、

水門に乗り上がるを、刈かる。

罔両の巨軀は柔し。斬り開くとて、瞬く

間に綴づる。死せぬ罔両を神と云うも道理。玖刈は死せぬ神を討つものなり。

椿。愛してる。かくも雷道士が如くや。顎開き、水底の汚泥垂らし、腐肉の臭気漂わ
せて餓臥は宣う。

「おのれ」

突き刺す刃を柔肉が掴み留む。その力
大山の如有り攀とも動かず。

「掛も畏き南守炎帝神農の妙成御恩頼
に依て此の玖刈の刃に來り座せ祝融尊神」

熱来る。焼成鳴りて蒙蒙と白煙上がる。

振り切れば、泥の如き肉が崩る。

赤熱たる刃で餓臥を打つ。

打たん毎に涅く泥お肉散る。

餓臥綴づるより玖刈の刃の薙ぐが早し。

椿、椿。罔両が鳴、雷道士の声音にて
鮮明に響く。

柄に貼り付く歪な鱗。雷道士の頬の。

「摯に食らったか、雷玉蘭を！」

椿、わたしはあなたになりたかった。

椿、わたしはあなたのそばにいたかった。

椿、わたしはあなたがほしい。

椿、わたしはあなたが食べたい。

深く裂いた餓臥の舐の内に、涅き剣あり。

罔両よ。雷道士の声で斯く放戯くならば。
言霊は魂にして魄にして命なると知れ。

「掛も掛も掛も愛き花港守雷玉蘭
道士の妙成御恩頼に依て木蓮の剣に來り

まし
座せ、一二三四五六七八九十の十種の御寶
を己が姿と変じ給いて自由自在に天界世界
人界を翔け給う龍神奇眼一連の御姿を顕
し給え」

玖刈の鎬で涅き剣を雪げば火花散りて、
餓臥の姿陰陽に乱れぬ。

餓臥の皮下に鍔の鱗生ず。
泥の肉散りて、大顎開き舐半ば裂け、
濤々と咆哮す。

軀て、涅肉融け落ち、龍身現る。
鍔の鱗もつ奇眼の龍、昇りて天翔け、
眼前に座したり。

椿、貴女を何にも殺させはしない。
それくらいなら、私が食べてしまいたい。

声は違えど、真く雷道士の御心なり。
いとあさましかる心根なり、好まし。

「為らば、如何なさる？」
右手を差し上げれば、龍降りて裂けたる
御頬を掌に当て、宣わす。

貴女の傍にいる。

貴女についていく。

貴女の命尽きる其の時まで傍にいて、貴女
を食べる。

椿は傳きて奏上す。
「有難き命なり。謹んで蒙り給う」

斯くして、玖刈椿は龍の加護を賜る。

五 後日譚

汽船が煙噴く。腹底に鳴動す。

潮風強かれど甲板に閑散と人あり。

「玖川様」

紙袋持て多門来る。社の氏子にして三鱗

重工の社員なり。

紙袋開くと湯気上りて多門の眼鏡ぞ曇る。

五、六個の熱き芝麻球あり。

「よろし」

一つ取りて放れば、

「呀」

颯風過ぎて、多門、眼鏡押さうる。

鍔の龍が芝麻球を顎に啞え、裂と

咀嚼して呑む。

多門退りて掌を合わせ礼拝す。

玉蘭、多門を奇眼で凝と見遣す。

「御眼差し悍し」

多門戦慄きて囁くに、椿は言ひ辱む。

「人食いの顎なり。汝を吟味せんや？」

「あなや、戯れ言とて恐ろし」

玉蘭、拗りて天津風吹き降す。

多門、眼鏡押えて這い蹲り、

「何卒、何卒」

と狼狽え拝む。

芝麻球放れば吹き散らして、玉蘭、慌て降

りて追ひ、啞えて戻る。言うに、

椿の淘气包！

「かたじけなし、許したまえ」

謝して、玉蘭の口先の芝麻球を齧り取る。

と、龍の口先が被さる。

熱き舌が椿の口中を侵して、鍔の味の

唾液が溶け広がる。呑み下して舌を吸えば、

龍の尾が空を薙ぐ。

椿、大好き。

薫風の声音で玉蘭は言う。

「椿も同心にあり」

仰いで答う。

蒼空に龍が躍る。

我らは命尽きるまで、伴にある。

* * *

東海を臨む岸壁に灯台がある。

其処に、神髓液の交換を怠り祐弔が集って

いると通報があった。

符弾を込めた鎗を手に、新人鬼律師がぼ

やく。

「またかあ。おれ害蟲駆除の為に鬼律師にな

ったんじゃないんだけどな」

千仁は答える。

「重い仕事など無い方がいい。行くぞ」

* * *

李梓睿は拡大鏡と図面を重ね見て、鏤の

鱗に星図を彫り込む。

あの後、龍となった雷姐が喉元から引き抜いて呉れた鱗だ。

「ですから、あんなところに汽罐置いちや

ダメだって言ったでしようがっ。もうわから

ん人だなあ！ 後で行くって伝えて！」

会客室で顧客の使者の言葉に悲鳴を上げ

ていた劉が、疲れた顔で弁公室に入ってくる。

「老師、您辛苦了」

「我はもう精疲力尽的ですよ。珈琲淹れる

から君も飲みなさい」

「僕が淹れますよ」

「不可です。我より美味しく淹れられるよ

うになってからやりなさい」

「えー」

「そっちはどうなんですか」

レイジーヨウ
李梓睿は星図を彫り終えた鱗を劉に渡す。
矯めつ眇めつ眺めた劉は言う。

「李君。彫刻師でも食べていけますよ」

「嘘だー、これ点と文字ばかりだもん」
ありがどうございます

「謝
ありがどうございます」
々と言いなさい、ここは」

「謝々 您」

「よろしい。填めてみなさい」

レイジーヨウ
李梓睿は渾天杖の一番内側の金環——真ん
ちへいかん
中の地平環に留めて星を指す天道環——に、
星図の刻まれた鱗を填め込む。

柄を持つと、くるっと環が回って地平線と

方位と星図を一挙に示した。

「ご覧なさい、この中に天地があります。君
は天地を握っているのです」

言って、劉はにやっと笑う。
すえおそろしい

「前途有望な子です、君は」
ラオセンせい

「劉老師、僕はね、仙人になるんです」

「それは難しいと思いますよー」

「そんなことないですー。無理だって言うな
ら、雷姐はどうなるんですかー」

イレギュラー
「人生に想定外はつきものです。それに、無
理だなんて言っていないません。難しいと言っ
たのです」

レイジーヨウ
劉は李梓睿の肩に手を置いて、言う。

「励みなさい」

「はい！」

こんでん
渾天杖を掲げると、雷玉蘭の鱗の填まった
せんかん
占環がくるくると回った。

僕はね、雲に乗って雷姐に会いに行くんだ
レイジーヨウ
からね。李梓睿は空を見上げる。

その時の僕を見たら、雷姐はどんな顔をす
るだろう？ びっくりして人間に戻ってしま
うかもしれない。

マソビョウ
媽祖廟の線香の煙が金環と龍鱗に絡む。

ひゅうー
遠吠えに似た蒸気の音が響く。

レイジーヨウ
雷姐。重ねて口笛を吹いて、李梓睿は蒸気
かす
で霞んだ青空の下を歩いて往く。

ばけものなど

魄魃／白友 麗:はくばつ 真・港:ポーバン

天蟲 麗:あまつとり 真・港:ティンチョン

柏訝 麗:ばっか 真・港:パーシア

天から来るもの

魑魅／离未 麗:ちみ 真:チーメイ 港:レイメイ

地鬼 麗:つちくれのおに 真:ディーグイ 港:ディーグワイ

撞穴 麗:しゅじく 真:チャンロウ 港:ツォンユク

地から湧くもの

魍魎／罔両 麗:もうりょう 真:ワンリャン 港:ワンレン

水神 麗:かわのかみ 真:シュイシェン 港:スイサン

餓臥 麗:がが 真:ウーウォ 港:ロウロウ

水に潜むもの

鯨鱗 麗:えびすたま

神髓のこと

黒晶 麗:くらのいわ

穢素のこと

燐晶炉 麗:みんへるの

爛式炉のこと

用語解説

※ 麗は麗奔語 真は青真国語 港は花港地方語

場所など

麗奔 麗:あきらのはや 真:リーベン 港:ライバン

北の魔境にある帝国

旭皇 麗:あさきみ

麗奔帝国における皇帝のこと

青真 麗:せいしん 真:チンジェ 港:チンツァン

物語の舞台となる国

斗君 麗:みかど 真:ドウジン 港:タオワン

青真国における皇帝のこと

花港 麗:かこう 真:ファー・ガン 港:ファー・ゴン

物語の舞台となる港町

白介 麗:ばっかい 真:バイ・ジェ 港:パー・カイ

地鬼が棲む廃墟

洪川 麗:こうせん 真:ホン・チュアン 港:ホン・チュイン

水運の要衝となっている大きな川

物など

神髄 麗:しんずい 真:シェンスイ 港:サンソイ

南氷洋のヒトガタから採取される神漿

穢素 麗:えそ 真:フイスー 港:ワイソ

穢れの結晶と言われる黒い塊

爛式炉 **inferno** 麗・真・港:インフェルノ

神髄と穢素を反応させて光輝を業火に変える

蒸気機関の熱源として使われる

か こう で ん き
花港伝奇
は な こ だ ま やぶ み ず と か
華は銚を破り水を爍す

発行

2018年 10月 28日

第四回文学フリマ福岡

作者

あ ま な み や じ ろ う
天波 八次浪

Twitter ID @yajirow

mail kuroyaji@gmail.com

